

科学研究費助成事業（基盤研究（S））中間評価

課題番号	19H05660	研究期間	令和元(2019)年度 ～令和5(2023)年度
研究課題名	翻訳規範とコンピテンスの可操作化を通じた翻訳プロセス・モデルと統合環境の構築	研究代表者 (所属・職) (令和3年3月現在)	影浦 峯 (東京大学・大学院教育学研究科・教授)

【令和3(2021)年度 中間評価結果】

評価	評価基準	
	A+	想定を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
○	A	順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
	A-	概ね順調に研究が進展しており、一定の成果が見込まれるが、一部に遅れ等が認められるため、今後努力が必要である
	B	研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
	C	研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である
(研究の概要)		
<p>本研究では、翻訳プロセスをアクターの行為とアイテムの操作として記述し、規範とコンピテンスに対応した翻訳プロセス・モデルを構築することを目的として、翻訳実務プロセスの明確化、メタ言語の設計と評価、翻訳プロセスの実装、統合的翻訳環境及び翻訳学習環境の構築と提供・評価などを計画している。</p>		
(意見等)		
<p>研究の進展状況について、研究計画調書に記載されている2020年度までの達成目標は、計画どおり達成されている。</p> <p>具体的には「翻訳プロセスを明示化するメタ言語の構築とこれを用いた（更なる）明確化」「翻訳プロセス支援する自動処理系の作成」「基盤となるデータベースの構築」の3項目について、いずれも当初目標を達成している。特に「翻訳プロセスを明示化するメタ言語の構築とこれを用いた（更なる）明確化」については、単に既往研究や文献等だけではなく、翻訳産業従事者等の実務者に対するアンケートや翻訳スキルの異なる者を被検者とする認知科学的な実験を含む「エビデンス」に基づいて作成されたユニークなものと考えられる。期待どおり得られた研究成果を、著名なジャーナルや国際会議などで多数発表しており、成果発信にも努めている。考案された翻訳プロセスの記述方法は概要が論文として公表されているだけでなく、国際的な活用を目指して詳細を編著書として出版しようとしており、今後が期待される。</p>		